

男体山登拝今昔

栃木県埋蔵文化財センター
篠原祐

日光連山の主峰、男体山。毎年、7月31日から8月7日まで期間、お山は登拝祭で賑わう。私もかつては2時間半で奥の宮に詣でたが、過日大学の先生達と登拝した時は、その倍かかった。

男体山の頂上は三日月型の火口壁になっていて、奥の宮はそ



の西寄り、東は女峰山につながる稜線となる。そして、最西端は高さ約30 mの巨岩であり、岩の上には太郎山神社が鎮座する。

案外、知られていないことであるが、この場所こそ、東国随一と称され、山の正倉院とまで言われる男体山頂遺跡である。

男体山頂遺跡は、昭和34年に発掘調査が行われ、出土品は国の重要文化財に指定されている。出土品は、飛鳥時代から現代のもので、特に奈良・平安時代のものは、国宝に指定されてもおかしくないほどの秀品揃いである。

では、なぜ、こんな高い山の頂上に、遺跡があるのであろう

か。現在は、中禅寺湖畔からの登山であるが、古代はそこまでも徒歩である。何日もかけて、様々なものを背負って、命がけで頂上を目指した理由は何であらうか。

あまり注目されない出土品に、古代役人が正装の時だけ身につけたベルトの飾りがある。石帯せきたいという石を磨いた飾りなのだが、身分によって使って良い石材が決められている。

男体山頂遺跡からは、メノウの石帯が見つかっている。メノウは四位（水戸黄門は從三位中納言だから、その下の位）に許されているものである。

古代の下野国司（国から派遣された栃木県知事）は五位が普通で、数人しか四位の人は任命されていない。状況証拠から、たぶん多治比真人今麻呂たじひのまひとまろさんの持ち物であろう。今麻呂さんは、



自分の代わりに大切な石帯を、
派遣した人に預けたのである。

また、全国でも貴重な鉄板で作った馬も出土している。これは都（今の京都にあった平安京）でしか使われないものだから、都から派遣された国司しか知らないものである。馬は雨乞いに用いられるので、807年（大同2）に勝道上人が行った雨乞いに、国司が持たせたものであろう。

さらに、下野国府（こくふ）（古代の県庁）や下野国分寺から見つかっていない灯明皿（とうみょうざら）が出土している。

る。これも役所の専用品が運ばれていることを示している。

どうも、命がけで頂上を目指

それは奈良時代の蝦夷地争乱

下野国府は、今の栃木市田村町にあった。そこから男体山は北西の方角にある。

だから、蝦夷の蜂起が伝えられた時、もっとも神に近いところで折れば効果があると考えたのは、自然な発想である。こうして、開山伝説の勝道上人以前にさかのぼる出土品が山頂に運ばれたのである。

平安時代になると、天門の神
おんみょうどう
は陰陽道の神「大將軍」だと
考えられた。大將軍は太白星
たいはくせい
(金星)の精で戦の神である。

平安時代後期。この頃にも国司が神にすぎらなくてはならない事件がある。平将門の乱である。